研究主題：主体的、対話的で深い学びの実現を目指して（２年次）

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
２０２２．１１．７
№２７　文責　荒木秀

「考え抜く力」を育成するために

１学期末の研究推進委員会の中で出された反省の中に、次のようなものがありました（「TANKYU１４号」参照）。

△教育目標，３つの資質・能力と授業を関連付ける。特に「考え抜く力」は，児童の自己評価も低い。どのようにしたら，児童の評価が上がるか。

１学期の学校評価とも関わらせて出された意見です。みなさん、どうですか？子どもたちの「考え抜く力」は育ってきていますか？いや、子ども達自身が「考え抜く力」が育ってきていると実感していますか？子どもたちが実感しないと、結局２学期の学校評価も同じ結果になってしまいますよ。「ＰＤＣＡサイクル」の「ＡＣＴＩＯＮ」を起こしましょう。

では、そもそも「考え抜く力」って、どんな力ですか？「考え抜く力」が育っている子どもの姿って、どんな姿ですか？いつもだと、ここで私の見解を書かせていただきますが、今回は書きません。先生方にも「考え抜いて」ほしいからです。ぜひ、ご自身で答えを見出してください。一人で無理ならば、回りの先生に聞けばいいんですよ。ちなみに私はこういうときに、逆の姿を想像するようにしています。今回であれば「考え抜く力」が育っていない子どもの姿って、どんな姿かということです。それがイメージできれば、その反対が答えになります。

「考え抜く力」の答えが出たら、次はそれを子どもたちにどうやって実感させますか？方法はいろいろあると思います。

- 授業や行事の終わりに、ふり返りとして話したり書かせたりする
- 授業や行事の終わりに、先生が総括して口頭で伝える
- カリマネ表を用いて、子どもたちと確認する（奥山先生が率先してされています）
- 通信を通して、子ども達の育ちを担任が伝える（伊藤先生がよくされています）
- キャリアパスポートや〇学期のめあてなどで、子どもたちと確認する　　等々

結果として実感することもあれば、めあてとして立てたものをふり返るという形もあると思います。どちらにしても、価値づけていくことが大切ですね。